

## [講演要旨]

## 先進的大区画ほ場における稲麦省力的二毛作技術の確立

林 元樹・中嶋泰則・濱田千裕・松家一夫・釋 一郎  
(愛知県農業総合試験場)

愛知県農業総合試験場安城農業技術センターでは、1995年度に県の単独事業により、高度な水管理（自動水位設定、循環灌漑、暗きよ間を利用した地下水位の設定等）が可能でかつ作業機の農道ターンが可能な傾斜農道を持つ、大区画ほ場(97a)を整備し、省力化に向けた試験を行っている。

1998年からは、愛知式不耕起播種機を利用した省力的な稲麦二毛作体系である、麦立毛中直播栽培(1998~2000年)と、稲麦同時播種栽培(2001年)の栽培実証試験を行っている。

その結果、試験期間を通じて、小麦及び水稲とも地域の平均をほぼ上回る、ほ場全刈り収量を得ることができた。また、ほ場内作業時間については、水稲への施肥法が確立されていなかった初年目(1998年産小麦~1999年産水稲)を除き、10a当たり1.5時間以内と極めて短時間であった。

このことから、先進的大区画ほ場と組み合わせることで、安定的かつ極めて省力的な稲麦二毛作体系の組立が可能であると考えられた。

[発表: 133回講演会]

## [講演要旨]

## 不耕起V溝播種機を用いた小麦栽培における肥効調節型肥料の適用性

初井隆志・松家一夫・林 元樹・小出俊則・大西浩章<sup>1</sup>・池田彰弘  
(愛知県農業総合試験場, <sup>1</sup>愛知県西三河農林水産事務所)

播種前浅耕後不耕起V溝播種機で播種する小麦栽培法は愛知県平坦部で普及しつつある。本小麦栽培法のさらなる省力化、また品質向上を目的として、肥効調節型肥料を用いた全量基肥栽培および分施肥栽培の検討を、慣行の速効性肥料を用いた分施肥栽培と比較して行った。試験は沖積土壌と洪積土壌の2か所で行った。

肥効調節型肥料の効果は、沖積土壌の方で大きい傾向がみられ、洪積土壌と異なる傾向がみられた。全量基肥栽培

では、出穂期以後葉色値の低下が観察される事例があったものの、慣行栽培に比較してほぼ同等かそれ以上の生育、収量を示した。蛋白質含量、容積重についても、慣行栽培に比較して高い傾向を示した。肥効調節型肥料を用いた分施肥栽培は、小粒化により慣行栽培よりも精子実重がやや少なくなる事例がみられたものの、精子実重、蛋白質含量、容積重において全量基肥栽培と似た傾向を示した。

[発表: 第133回講演会]